



中村俊定文庫  
文庫 18  
873





志形所國語討のさきある。詔域

為まひありしを後へし

祖母の御細を慕ふも是れ也

高きゆりある。河合氏名良し

志形所おろを慕ふ也此河合の御也

志形の御後も後ある書の標記也

片まゝかの馬のあらふ所ふの志形



杖の如くもさむのいひも  
 地はともを速くも休る支何基  
 需は家をくまも也午時弘化  
 丙午の生誕時子の信士揚壽  
 年を福子と名の意下は孫

杖の跡集春之類



望日もあるまゝなり名残久江戸由誓  
 夕暮や花をたけいふんえんちか 松竹  
 名残あまも結と見えぬゆづ 菜新  
 降りの東まゝのまゝ 柳久 湖山  
 生れ中や消も志まゝふま結月 雀箱  
 とも結を志まゝをまゝ結言音 水久

枕打しゆく<sup>し</sup>の<sup>し</sup>無も<sup>せ</sup>た<sup>る</sup>春<sup>は</sup>能<sup>く</sup>宵<sup>は</sup> 惟<sup>も</sup>草

冴<sup>る</sup>春<sup>を</sup>冬<sup>より</sup>う<sup>ら</sup>ま<sup>へ</sup>る<sup>を</sup>も<sup>の</sup>月<sup>は</sup> 卓<sup>郎</sup>

春<sup>は</sup>能<sup>く</sup>月<sup>を</sup>秤<sup>ひ</sup>四五<sup>寸</sup>能<sup>く</sup>さ<sup>る</sup>え<sup>れ</sup> 錦<sup>枝</sup>女

菜<sup>の</sup>む<sup>ね</sup>能<sup>く</sup>薫<sup>り</sup>う<sup>ら</sup>ま<sup>へ</sup>る<sup>を</sup> 細<sup>草</sup>皇<sup>女</sup> 如<sup>息</sup>

使<sup>し</sup>ゆく<sup>能</sup>の<sup>ま</sup>志<sup>く</sup>く<sup>や</sup>二<sup>日</sup>炭<sup>京</sup> 杜<sup>鰐</sup>

眼<sup>の</sup>新<sup>し</sup>を<sup>自</sup>白<sup>の</sup>春<sup>を</sup>中<sup>丘</sup>の<sup>梅</sup> 梅<sup>石</sup>

春<sup>は</sup>柳<sup>や</sup>雲<sup>を</sup>ち<sup>り</sup>り<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>す</sup>顔<sup>風</sup> 光

つ<sup>つ</sup>相<sup>を</sup>能<sup>く</sup>下<sup>る</sup>く<sup>る</sup>新<sup>し</sup>を<sup>春</sup>の<sup>月</sup> 枝<sup>月</sup>

家<sup>を</sup>あ<sup>き</sup>て<sup>乙</sup>夜<sup>も</sup>春<sup>を</sup>和<sup>敷</sup>の<sup>奥</sup> 淡<sup>草</sup>

正<sup>月</sup>や<sup>魚</sup>の<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>く<sup>く</sup>へ<sup>る</sup>を<sup>ら</sup> <sup>伏見</sup>岳<sup>風</sup>

空<sup>を</sup>い<sup>と</sup>と<sup>ら</sup>き<sup>の</sup>よ<sup>ま</sup>を<sup>な</sup>り<sup>を</sup>り<sup>梅</sup> <sup>作法</sup>白<sup>鳥</sup>

七<sup>種</sup>の<sup>数</sup>も<sup>か</sup>を<sup>き</sup>う<sup>め</sup>の<sup>花</sup> 吾<sup>三</sup>

ま<sup>つ</sup>る<sup>を</sup>や<sup>お</sup>な<sup>り</sup>み<sup>たり</sup>能<sup>く</sup>お<sup>と</sup>竹<sup>長</sup> 莊

ま<sup>つ</sup>る<sup>を</sup>や<sup>梅</sup>能<sup>く</sup>み<sup>たり</sup>の<sup>袖</sup>も<sup>く</sup> 國<sup>女</sup>

翅板うつむや睦月の料理厨 嵐山  
 花鳥結とかりとせはよも結風 孟阿  
 雪とけや門より世のつる川 陸奥 多代女  
 挽通る芥の帯や挿しこし 西窠  
 苔結草の帯をかり蕙の白の乳 弓阿  
 ことよりややうらふ心も凝目 雪 天趣  
 下結を以てあつけき世をり水乳 舍用  
 満月の出や挿しこしや世の中 社宅 風子

雪結餅きのよと風よ吹せたり 行徳 葉臺  
 見やみたらうまけや世や播多菜 路臣  
 持世とやうく汲しと稱よ小結ふ 池宿  
 梅もらひをぬ枝をよ譽よたり 壺甫  
 舟より舟よ船あまや世のる月 玉高  
 植木庭に世に仕舞子結ふ 因幡 寸風  
 結合よ日糸子結のよ 雲々り 佛兒  
 お結う身をつるらひを結猫の意 加賀 素玉

樹能雪の常と打つを麻年日改 雲 里  
 万葉とまき 控へて中ひとう家 素柳  
 ちり 掃へ 淋しき ちり 扇の裏 欽哉  
 せつ心子と 控へて 早し紙書信法 墨 芳  
 美水と 中流 せり 梅の扇 一子  
 美意 伝へて 心と せり 二日 炭 懸 野  
 美能や 水を 離るる 美しき 其 色  
 意 死と 崎の 猫と 扇と ちり 三 考 良

遠矢射と 眼當と 控へ 柳 乳 阿波 風 柳  
 かけ 法水の 打ち ぬき ちり 柳 心 山  
 ちり ちり 遊の ちり 柳 扇 立 守  
 春と 人 ち 皆 袴 美と 春の 月 雨 青  
 春 音 能 日 打 ちり ちり 二月 小 梅 堂  
 加き 春 去 探し 梅 堂 の 日 一 乳 如 ち  
 山 子 春 や 春 と 柳 ちり 柳 ちり 後 人 ち  
 ちり ちり ちり ちり ちり ちり 武 藤 菊 ち

うさぎのたをたきとまぬ柳の 和 表  
 青い墨の加さくこのらんや青の冷 一 因  
 仰向を常かきくや朝のまを 業 登  
 友をを二三日拂き置よき 成 成  
 鳴りけりたしく下る空を 松 雨  
 青の影をまやせまを 一 表  
 ちけと備よきとあけらるる 羽 羽  
 朝風をまう 二 丘

春さく人も 由 之  
 朝の清がけは 水 水  
 山水や長閑な色と 伊勢 流 芳  
 初鴨のそつけ初る 米 牛  
 春やまの音見らる サキ 音 支  
 人待や柳のあり 今 是  
 ちくくと 任 天 葵  
 春もまう 女 湖 蝶



暎あなへそまゝしこかぬさうし  
 二表  
 籠束やとらうこの月の出交  
 奇丈  
 足定ぬ結つこのりききう梅久  
 巴休  
 身よとらうり結さうりやむの蔭  
 尾張 月 殿  
 雲結来うよく足えききや命の糸  
 應知  
 人を多老うまかり持梅の花  
 魚洋  
 春白能晴るよつむやこ葉ちそ  
 南交  
 終持こりて交の志まはやく  
 性 宝 秋

能かと思よまうり結遠き音の乳  
 円二  
 そとらやうて出さうつむさきさうり  
 乙 旌  
 花もさうり首さうりさうり羽後う乳  
 蝶六  
 ふけさ梅さうりさうり梅のみさうりさ  
 加賀 完 和  
 梅雪のまゝに結きぬらやま川 鴨  
 任 徳 百 丈  
 よろみさうりさうりさうりやまの山  
 龜 三  
 松杉の雪白さうりやまの日の出  
 栗 水  
 おこささうり 結さうり新とまきり  
 兜 友

ちとさう草む人もあり谷の山 如  
 誰らもあつ引ける砂地の水松杜 吉江  
 ちと風やうつらの尾上の宮うらー 且 松  
 ちとちと草むらせりやきうのち 嵐 牛  
 ちとちと牛の草むらせり 甲斐 菟 尾  
 ちとちと牛の草むらせり 下谷 雷 石  
 二月の流せよきいさあうー 可 精  
 ちとちと牛の草むらせり 下谷 抱の女

海原やちとちと牛の草むらせり 仁 里  
 ちとちと牛の草むらせり 汀 砂  
 ちとちと牛の草むらせり 吉江 貞 山  
 ちとちと牛の草むらせり 清 海  
 ちとちと牛の草むらせり 青 茨  
 ちとちと牛の草むらせり 武藏 左 山  
 ちとちと牛の草むらせり 玉 芝  
 ちとちと牛の草むらせり 橋 草

あつて咲ぬ梅は久しきよきよき  
竹濠 弥天

長きゆふさきと音とありて  
揚雪崖 松月

降る雪のちかやうなうらな  
牛丸

籠もる雪のちかやうなうらな  
告夜

喜新雪風の落きやうなうらな  
山屏

雪新山出やうなうらな  
沼河 滝山

降る雪のちかやうなうらな  
竹友

教新木のきよきよき  
青雀

帰る雪のちかやうなうらな  
其萬

肉を食やうなうらな  
里桂

大橋の菜子やうなうらな  
朴山

香新あやうなうらな  
梅の香 悉く

火も水も志らぬ  
上空 朗

あつてあつてあつて  
一

乙鳥やあつてあつて  
サスキ 稚

あつてあつてあつて  
イヨ 奥

廣り花推し又をうつし 巳 曉  
 噴く如く 奥あけ花の曇り 蘇 筆 山  
 梅は月影を 梅は月影を 楓 任花 尾  
 土のまゝ 盃さきや 若菜 里 扇  
 山吹の咲き 咲きゆく 少年 少年 一 山  
 倉のしの押さるる 福来存 采 之  
 梅姫 一 盃さき 管束さ 月 とに 盧 白  
 かけきく 鶴も 玉 福

藪入のうらも 工方やら 意の板 陶 季  
 階多田や 池をまゝ 花の影 月 鼓  
 山焼のりも 忘るぬ 楓 下  
 管や 崙をのり 崎 指 山  
 待客を 一本 花見 水 竹 三河  
 松と 壺 蓮 宇  
 青い木も 晴 只 見 塞 馬  
 尺と 壺 大坂 大坂 折 左



冷々集々 形も大ききちの痛ふ 此川  
 ちろみよの着てくまの程は 巖谷  
 川裁の裸身より 菅の丸 菅江 橋宮  
 水の石や多きを遠く流りけ 斗南  
 香飯や通より 采子香 紀伊 閑那  
 是けしやの道しるを 武蔵 風石  
 友水や 飯きく富士の雪根は イヨ 映門  
 式書をよこを 使や 社若 材也

短歌や 森邊へ入る橋の物と 溪山  
 新藤くまの道や 赤や 貴冬  
 ちと 起てらんま 佐徳 五眺  
 弦きと 音人 宮先や 友の月 省高  
 心よも 出給と 痛ら 控ぬ 暑氣 巳谷  
 月のと 散き 音人 ち 牡丹 考香  
 五月の 結山して 望山の 移りき 一高  
 おもひ 音人 舟の中 新き 音人 佳雄



乳癖のの 晉川の 並ふ 田植の 槐 堂  
 粘のまゝく かりまゝく きき 信の 居  
 二三本 坊末よま やまの あり 九 缸  
 人の 腕を 伸ゆく 滑中よ 漁 翁  
 若くは 支一 たり 芥子と 草ひき  
 涼きや 四五本 たりと 休の 影 月 栢  
 あらま 程々 あまの 影の 影 田 鶴 小 丸 池  
 物々 山崎 一 たり ぬ 郭 公 青 湖

伸造く 散葉の 一 たり 年 竹 梅 我  
 新く 暮る 風の やま たり 阿や ぬ 一 窓  
 ちの せま たり 人 紀 きの 飯 巻 丸 山 亭  
 明の ころ たり 水 けり たり たり 甲 著  
 二月や 新く 水 たり たり 井 底の 底 草 也  
 晴下 たり たり たり たり たり 三 浦 良  
 山 たり たり たり 水 たり たり 鏡 の たり たり 竹 烟  
 百姓よ あり たり たり たり 芥子 たり 乙 人



解羅水のひきや友生後 松陰  
 見えし人見きけるや青卷 拾得 冬岐  
 郭公 清ぬきなき能野山久 位徳 露月  
 五月もや揚るある藤よきの候 双柳  
 物とらふきき能取深き水鶴乳 一風  
 控子能花より向あふり影うる 英丈  
 此河原家ありのしる夕きみ 高富  
 字能たをぬきしきと友の目 笑仙

かゆいし人かせしきみ 三岳 三岳  
 飯巻る人能うらや萩の目 親風  
 寐心よ持てこの出ぬる郭公 四也  
 しのぶの葉やとまのまの菖子 江戸 碓岩  
 夕鳥や遊しき中れ一重垣 流芝  
 涼しきや妙々草薙の夜ひら 涼

念佛の中も秋を焚くあり  
 しみよの鳥も六邊に鳴り  
 友の愛用なき戸を叩く  
 着くまうらう秋のまき  
 下結片は流るる夜をみよ  
 之や櫛のさうらうまき  
 かり病のありまき  
 一具

秋の部

早うりまの聖朝の馬や秋の音  
 名月の影を結く一束乳  
 咲き一葉よ雪の山路を  
 まつ秋や一所も起る隣  
 藤原やまのまき  
 灯火のうらうらを見せハ一葉小  
 其とまきを叩く  
 葉の香やまのまき

泉池  
 完伍  
 茶岡  
 石采  
 西馬  
 波江  
 杉曉  
 桃心

苔の暗さりのこぼれを惜みたり 任法 苔古

流きり水も癒きり 桐一葉 散高

露の音もや ヒタキ 四葉

見こぼれの多きみぢりて角力也 月丸

菊の香を推しおこし 女 花也

初まうそ細くからしや唐土し 新菊

田舎のかき 思ふも秋野分は 中菊

宿くくくも 田舎中ぬ掃花火 吉江 英白

新先く何もあるを 吉江 秋の音 桐古

明けきりのさぬきり 甲斐 露新上 通志

納めくくくも花つくと萩の花 栞菊

秋の月曇りたる川の林うさ 石年

秋鳥り花をさるる ヒタキ 麦外

萩提て花よりふくき 任法 流きりれ 野菓

置時分人新引く 女 吟子かき 月卯

み字に花をさるる 女 露の置より 雲堂

日紅向を知らず集るあきの鏡 其高  
 葉の色極く是をたぐりたる 片我  
 芦原くま川流つくやまうり鳥 松生  
 海邊まで種波の多つや秋の風 来耳  
 龍丘や青くさみの来り一葉つ 三考里  
 明くまの来を引谷の紅葉のれ 尾張 梅理  
 石能子をつけぬ葉をほし 加賀 悠平  
 十六歌や水くまあふ木に雲 伊勢 湛石

秋の鏡を知らず集るあきの鏡 其高  
 葉の色極く是をたぐりたる 片我  
 芦原くま川流つくやまうり鳥 松生  
 海邊まで種波の多つや秋の風 来耳  
 龍丘や青くさみの来り一葉つ 三考里  
 明くまの来を引谷の紅葉のれ 尾張 梅理  
 石能子をつけぬ葉をほし 加賀 悠平  
 十六歌や水くまあふ木に雲 伊勢 湛石  
 秋の鏡を知らず集るあきの鏡 其高  
 葉の色極く是をたぐりたる 片我  
 芦原くま川流つくやまうり鳥 松生  
 海邊まで種波の多つや秋の風 来耳  
 龍丘や青くさみの来り一葉つ 三考里  
 明くまの来を引谷の紅葉のれ 尾張 梅理  
 石能子をつけぬ葉をほし 加賀 悠平  
 十六歌や水くまあふ木に雲 伊勢 湛石

袴着てつゞき志をうとく秋の秋 秋後 風 眉

とらるるやる石あはるきハ星月東 晴 雲

池城さすく見えてわくや秋の蝶 積 翠

種より出ると蒞りつける花さきふ 子 英

兼守のむしき根の晴と来より 空水 一

うけ縮れく〜路をゆくぬわの山 経法 湖 玉

岸簪重足さるきさるく山の月 老之志

郭と帰く〜あはるや天は川 吾 六

月けりききと錢見を和秋の山 松 甫

いりとも年と秋とや若れ考 常 風

草取く〜手とおもこれぬきりふ 梅 葉

白の葉能乳てらるや秋法葉 雲 風

若合り集りゆ〜あはる葉見く 路河 岱 元

種より出るとそのあはるきさきふ 菊 輝

村自や木の宮能若乃 起より 是 路

在冬く尾よりむきり月見く 近江 可 松

東よりうらら一羽もりの秋の序 其後 楚雀

剡之川もくも鉦刺の秋の序 任法 獨醒

燒推もくもく小村の秋の序 任法 三古

置去の繩もくもくすの月 任法 抱雪

日よけの思もくもく和秋の序 任法 兼女

風呂焚て人よく秋の序 任法 湖岸

唐の序もくもく又の月 任法 斗茶

隣よりくもく地り 任法 文席

葉を見てもくもく仕舞 其後 娘山

お前様の幾度も 其後 春室

まの序やかき 其後 乙良

捨多 其後 水糸

水つき 其後 菊村

地 其後 江之

精 其後 静

保 其後 栗人

片是を流るるを火に 随風  
 きりく 春啼や 暮家能 枕元 少年 若士  
 二日月如 一秋能 舞臺り 里曉  
 白雲や 垂るる 如き ぬ 東の 宿 冬木  
 出る 雲と 見 覚えの あり 宿 能 月 呂友  
 幸く 多 秋 能 淋し 和 秋の 醉 捲 芝  
 加 中 流るる 子 能 也 多 しく 以 盡 ぬ 月 下 終 呂 岐  
 暮 能 秋 能 流るる 多 しく 以 盡 ぬ 月 下 終 呂 岐

ち ぬ 阿 羅 漢 未 あり 秋 の 三 百 能 月 謝 堂  
 河 上 流 木 の 葉 多 しく 和 后 の 月 菊 古  
 比 ら 秋 今 年 日 晴 一 生 月 魂 鹿 山  
 口 下 一 ち む の 白 雲 一 月 見 ぬ 大 莫  
 水 車 引 揚 げ あり 能 多 しく 加 春 為 山  
 ぬ 多 しく 暮 能 多 しく 以 盡 ぬ 月 下 終 呂 岐

冬 終 部

ぬ 多 しく 暮 能 多 しく 以 盡 ぬ 月 下 終 呂 岐

烟中しやてりしや 雪の入 桃鳥  
 鐘の音は思ふ山 雪の行時自は 黄  
 山 雪水 了  
 大雪や磨りや 打り時分 回  
 来 降積りしや 雪の舟 信法 静  
 一 花咲く何處も 淋しき 雪結木  
 小 柳子 ありしや 雪の音 三  
 寄 雪の音 柳子 柳子 柳子  
 柳子 柳子 柳子 柳子

雪の音は思ふ山 雪の行時自は 黄  
 山 雪水 了  
 大雪や磨りや 打り時分 回  
 来 降積りしや 雪の舟 信法 静  
 一 花咲く何處も 淋しき 雪結木  
 小 柳子 ありしや 雪の音 三  
 寄 雪の音 柳子 柳子 柳子  
 柳子 柳子 柳子 柳子



所鴨の池に居眠る小甚小 松山  
あゝ望の平如移く白くさるる水 喜壺  
水はくしと降音をのむ志く甚く丸 梅落  
待て居て雪落さるる中つのは行 ヒセシ 悠々  
都坐しとや流さるる世ぬちと里炭 岱雲  
空月や明くゆみの見ゆる敷 イセ 夜白  
そ是市との火種なくす巻網代守 菴皮  
青掃ぬ人々くつる中もやの風 甲斐 石窓

追ふくくも水はくちぬみそ世に 卓牛  
寂しうも能難きそと中霧の朝 行徳 茶山  
人住ぬまへく入るる冬能月 月歩  
ま川雪や一日もきと竹臺子 玄及  
醒かくそ能東海一大海日 一逞  
雪能雪舞と音する斗室之 イヨ 湖風  
空月の雪風つきて明くさるる イヨ 暮村  
東も水能音するつきてる雪葉水 天石



十月の空うつくや藪の隈 江戸 伯遠  
 柞もかゝる風情やまつ時自 南枝  
 魚も物々葉も焚き実結子よ 叩月  
 松もた目又餘り村志くき 青林  
 炭ありよ海々の風あり言結翁 言山  
 風もあきよ水鏡もあはる心地丸 菊頃  
 掃除くく忍るや八つ手のある阿そり 小栢  
 汐加るくよきく志くく磯家小 味舎

志ありやう糸林よ山自あり川子雪 竹殿  
 志山と志子雪ふ志くも東う丸 抱琴  
 さあくの葉結ひよきや冬の時 南汀  
 葉葉しや虫の葉をかり結りそり 蕙畝  
 不結うけりる萩更や萩の葉結雪 龜坂  
 新島結葉葉ら喜き時自丸 妻峯  
 市中の陰うと志くは年 玉橋 の雪 濃紫  
 雪ちやあめくくめく木戸の音 白起

葉花散るよふはしらとや多仙花 祖  
君常々枯しきや松の中 山  
うら〜と志する天を葉をな葉は 抱  
あつ〜やさくらとあまふ人花と 丁  
知

歌仙

柳ま〜なむや芽の〜と見えぬ月 嵐  
軒の下〜と春の猫啼 銀

この世をさきの〜と見えぬ月 嵐  
加ふ花むの〜のおそなま〜と危 銀  
置〜と見えぬ〜と見えぬ月 銀  
月を入〜と見えぬ〜と見えぬ月 銀

長生花を自がり〜と見えぬ月 若  
梅咲多〜と見えぬ〜と見えぬ月 銀  
草花を〜と見えぬ〜と見えぬ月 銀

茶峯下と柴折と  
十六束も忘る程の習杖  
何爰の礎もいふも採るぬ  
風名爰と菌をつむ成り足  
湯その石とよめぬ石ふみ  
須磨寺を思ひの外と意増り  
采子名啼る能降るやみ  
去りゆく鹽の産のうらみぬけ  
人、人、人、人、人

意能うまのま事多る良  
三日月の獲るまをいふと  
雲日能角力の取組の沙汰  
とら所と千多めんをねみあけ  
土産さし出は名物の餅  
花を見と捨能筆を置き忘る  
旅乃とらをまむむ其風  
人、人、人、人、人

管絃奏も愈々川中風くあり

管絃

さういを載と梅の志白

弄志

春水流き流き身も流きりて

流志

さういも一際目立梅柳

志

畫写さうと階をかりて月よあ

階志

いひき角力能縁と舞

志

餅菓もも彼岸すも賣き出し

成志

此つらさうと粧む病也

志

新燈をあちらへむきうも能

成

祓宜のめかけさうと

志

舞表さうかろくそくの雪降

成

雀もたうのぬ湖の志りう

志

伯樂其徳利を月さうと

成

多活をけさうと碓石と打

志

椽例へやたらうと菌りたら

成

おのつらさうと何の写りあ

志

世中をゆく心つく花見より

山をくぐりみる暮る鐘の音

地を渡る道を見えたり暮る雪

ふらりと加ふる軒の志す梅

靴打きもせぬ言をきく

下なる料理を暮らさるる

待てる月をうらむと海の上

感

志

感  
銀

五  
眺

感

眺

感

をり砂のまゝ秋風

新米のつゆお場のうかき

状の返す言志する深切

吾相子早過ぎの物知り

固扇をかりて腰を投せぬ

般巻く少の内もふたなり

只とらくと笑流る

世中の宮と見ゆる月の照り

眺

感

眺

感

眺

感

眺

感

志のむらさきをうかす紅糸

眺

朝のふく角力の木戸のこつて

成

まきまき〜箱と餅をむく

眺

花よりとよ〜流るる庭に白

成

まほお〜や〜まほの曙

眺

牡丹見のとめ鏡つ〜やりの申刻

風 調

羽織 序 子 郵 呂 吟

報 成

白鳥もる古もつめと桐ゆり

一

歌の出来ると 祢庵を焼

調

忘ま人のとら〜志まぬ月の節

成

さ〜 秋のゆくを年

一

竹の居る 柚味 寄るをむせり

調

き〜て 毛物をいそぬり分

成

う〜らより 若うん〜を袴こし

一

舞表のうの 意き 相殿

調



ちりくと明石粒もかきし  
 年終月よりを秋の立言  
 寐入鼻つたかき起る月  
 崩きと築を人々し  
 いよいよまき手はあく輪の秋  
 大勢ありと子と肩もさし  
 八幡かゝ花の巻りか呼ひ使  
 風のやふりよつき初秋

一 盛 朔 一 盛 朔 一 盛

百歌

石を押さるるまはるる雪は家  
 養分氷ううつた燈火  
 狗子の人終るる帰初  
 ちりと雪のり布よ並もぬ  
 年を終り行くを冬のみよを終  
 新うううううううううう

銀 盛 若 人 嵐 外 雲 里 可 精 銀 哉

春を知らず日つひに春の月

菟唇

露のちろちろを見せる草花種

玉指

うそなき雪水連花布衣

礪山

泪出なく粥の糲多き

乙也

子を撫む覚悟も胸に何あり

陶年

いさぬかせぬ取のふ穉嬢

杜鰲

清く池を思ふありき生家

素峰

遠夕立ち日短りたる儼

文芥

長櫃を踏むころふれきつ途

花梅

手初らぬ春新蕎麦の熟く

风光

山ゆきも去らぬ富貴な里の月

有苔

放したる花言も飛もせぬ

雨江

活旅変らついでに打たれ霧深く

宛和

二階をかりて長靴深留

候昔

生魚を海の打つてこめる是

梅室

春や日直り——初缸の白

感年

石まゝに休むかまゝの袖を脱 梅通

生一に髪を又まそと刺 白鷗

廿年志す一君の人面を 鼎左

抱くある世話の夜一控子 其山

也さゝ葉よりすきく難をならぬ為 虚白

通る時刻の世に話花結 梅理

まゝに〜とをを兒色屋根の雪 而后

別よ未福る 枝の色を肩 應知

志す〜に肉に納はの事はより 茨山

水撥〜に茶の湯催は 石采

見より〜にあれもよあわ〜と云 玉極

有明を〜に昇る冬は日 卓池

長〜掃もすき〜に船を園山之 水井

遠〜に春は〜を少所は 菴宇

<sup>二</sup> <sup>あ</sup> 城の孔き名己の風は吹返す 貞山

久〜にわろ旅も苦よせぬ 社水

経少しよきぬを著よ多神のけん	桐古
とやきい新燈のぼり引せる	栢宮
棟柱を立早の白陸	嵐牛
いづも氷室の使せよき	一晁
土地打進めぬ葉がまらぬ笑言を	其篤
目ええすまぬを胃のときつ	里桂
月影も有るけさのけ夕曇り	碧山
又新きぬを雪を	春雀

茅培もあひて植うよりかき	菱古
生息して変れ志進ぬ馬の子	教
神業はやうといふは蜂の夜	成充
とつてかへせぬ雲を産桑橋	竹友
三 足本を飛うよ襟のつらき	朴山
能は礼を丁寧よ	立守
脱換の百連さうを名懸顔屋	雨春
手垢をとりわすぬ帳めん	梅峯

啼村の空りも打きし能く起る 関二

六所能常の教ふあり也 鱈翁

切長く一腕燭の去んほせくと 竹烟

合点のゆくの姉の口物り 流芝

刀差は月よふサをそ能おしむ 永久

叱川と牛能先一川哉を 三星

見す志くはさかり 暮空よ宿の月 風和

古よおき控り 曇きぬ新線 素明

鐘研く水よ飛也きく〜 全夢

寺能遠きよらま成つてやは 五眺

エウ  
あらしもりやふらふらと〜 嵩古

雪能あまのふ般のまほし出る 大莫

菖蒲ふく木曾の宿屋の道〜 柴也

白袴つけし見せる 香たこ 呂史

蓮よあまね菜をよこゆきふら〜 松什

尾よち早い控鐘をつ〜 得盡

湖を返す村自れ一文字 車郎

他國こころに能替女あなつ 見加

酒火も物もいづれ夕暮る 流

忙病神をまねらうを自 途洞

出代りを流しに物をもすら 臥崔

和川原とくす 盆のゆき菱 西馬

花の名を過す 和葉の阿田川 湖山

富吉と筑波水舟をくらふ 汲江

十

榮耀す、身も及指を引まとい 桂翁

狭路も言まふよせこ口きく 通志

結細き入に流越を近習向 雄飛

風のかたきれと自よねる書 獨醒

揚泥のかきく自いのわも暑く 奥阿

捨ち統の毛穴あくる 栗人

路次はうす用を石を引捨て 鳥翁

質結利あけも任其舟お 左

切少く見ても案抄のよきい獲 月外  
 秋明も知事ぬいふるを志什 白高  
 滑も折く細のかけを造思し 中首  
 出村中より一堀り井いよつ 敬高  
 合ふふとかくけあふ日秋 大雅  
 黄少くはなりふくさるる 栗村 風眉  
 築場うへ殿内と人の眠りかき 子英  
 著のりを造るもみしうとく 露月

小とくくはあつたゆき中なり 孟阿  
 去歩れををたてて大寺 山外  
 謙政古くはあつたまらなく 伯遠  
 蚕糸もくくをたてて志心 謝堂  
 咲花の村法度と志心 風朗  
 ゆきうふなりし春の日秋秋 弄志

鷺湖

波ふけあちどりけりて中野の景 故 菅良  
 非席やねむくさく湖の月、 文甫  
 以相うらや氷けりて布衣亭、 自治  
 湖の青く見ゆる中野の景、 千丈  
 湖を秋のまやうにほくさく、 周行  
 是れらのうみやまをわきまを極む、 素架  
 ふきけりてまやうにほくさく、 敬高  
 湖の居がうらやみあつて、 其齡

魚をくもけりてや湖をなれあやめ、 正阿

湖へさくくさくさく 半 善人

富士の雪おろすまやうにほくさく 半 卓池

和秋を汗消さる 古 風朗

交くさくさくさく

富士の新澄や湖を秋の月 銀岱

燒捨



袖よりおぼくもやと音の月が露、

うけ橋

夕月や鴨の啼き多し是の下、

筆捲

山にわら華と秋の月と露と、

二見

郭公啼や二見の萩を涉し、

須磨

いとさかり松も音あり 塚の音、

明石

日よかきま扇の影や淡路急、

宮崎

旅よ志す秋のよきとや東の白、

大宰府

冬よんと咲ゆはつとや神の梅、

松浦

浦のいやくそくそ磯子島、

住吉

船東や持よりとせわ岸の松、

嵐山

花柳ささり幸ひの松笠、

吉野

心の中と志より吉野の花乃歌、

追加

行車中挿除送々のさ加一もの 呂川

是より山席落の舟能きまゝの 警眠

卯月野やしく啼入る能き 江月

行車より人々推むく本取の花 一甫

移美やあくも出たは侍舞より 友甫

中川人々痛入るる詠やあきま 子紫

まみりしや銀流の火見や所の中 熊身

峯つらと雲をさすやうに宵の月

ヒタキ

清身

ものとも山をなすぬ実子鳥

梅曉女

修光葉や船へ四と召四は濁り

一兆

雪のともなうりよを志抑く船巻小

清山

白雪能走且目より大暑さう乳

木公

吾渡りもかきうやうり初程

赤雲

内海の風よ色あり青蘆

水啓

おく深き一箱つや風薫

一雪

芥 入道お城のあまこ実子鳥

少竹

満月のふらふら行や夏のみ

志好女

いとけしづ解の飛来を雲笑小

枝川

ひとをみたるのかきうりや松うかや

盲人

若菜

手編りようり飛きたる雲う乳

宜山

曉も追し鶉船の魚の教

隣松

うかきうりよを治ありり子規

房女

袴美々よと氣巻うり庭や白牡丹

一粒

とくまぐく 美草花中の山家<sup>ヒタキ</sup> 湖島

月涼 群けくをを 松と何り 笑 紫

國より 相交のちや 何とて 猫 風

とんち 衆の衆より 大やらん 妙如 物 子 香

仙島軍人書

うー 雲の雲を みるみる 二  
えの本を 見る かくる ちんちん  
仇討者の 空を 何とて し  
らるる 衆の 妙如 物

もりのつらきまゝに

松屋

はゝのつらきまゝに

代

松屋主人



